

図書館だより

本を書く人

図書館長 村田 和穂

〈右〉ケンブリッジ再訪 (2023): 〈大学図書館〉にて



もう20年も前のことになりますが、文科省の研究プログラムに採択され、イギリスのケンブリッジ大学に1年間 (2005-06) 留学する機会に恵まれました。英文科の〈客員研究員 (visiting scholar)〉になれたことで、大学の施設の利用や講義の聴講はもちろんのこと、以前メールのやり取りをしたことがある教授の個人指導を受けられたのはこの上ない幸運だったと思います。留学中は授業や校務から解放されて自由を満喫しました。とは言え、平日は規則正しく朝から大学へ通い、講義のない時だけでなく夏休みなどの長期休暇中もほぼ毎日〈大学図書館 (University Library)〉に籠 (こ) もり、目も眩むほどの膨大な蔵書から自分の研究に関係のありそうな研究書や論文を引っぱり出しては読み漁る日々でした。この時ほど貪欲に知識を吸収して血肉化しようと努めた時期は後にも先にもありません。このように研究に集中できたのも家族同伴の留学だったことが大きく、大学から帰宅するとリスが棲む木立のある広々とした芝生の庭を、当時2歳の娘と思いきり走り回って遊ぶことが息抜きになりました。留学中の〈ライフ (命)〉の残量は目に見えるほどにリアルです。毎朝、有名なキングズ・カレッジを通り抜けて (旅行者は有料)、図書館や英文科棟に行くのが日課だったのですが、留学も残り3ヶ月を切ると「ここを通れるのもあと何日か」とカウントダウンしながら〈今〉を大事に生きていました。ケンブリッジでの私の居場所は図書館北棟の6階 (英国流では5階) の窓に面した席。この図書館では、読みかけの本に所定の葉を挟んでおけば、1週間は書棚に戻さず机に置いておくことができます。そうやって数え切れないほど多くの文献をノートを取りつつ読んだものです。ただ、残り数週間になる頃には、がむしゃらに書物に向かうというよりは、窓の外景色をぼんやり眺めながら自分の来し方行く末に想いを馳せることがどうしても多くなるようです。「今取り組んでいる研究をいつの日か一冊の本にまとめて、この図書館に収めたい」、それが当時の切なる願いでした。

帰国してからは多忙な日常に逆戻り。それでも週末は教員室に泊まりこんでコツコツと研究を続けました。そしてようやく、8年後の2014年に学位申請論文を完成させ、母校の大学に提出、翌年学位〈博士 (文学)〉を取得します。この論文執筆も苦労しましたが、単行書としての出版が最終目標だったので大変なのはそれからでした。完成論文を批判的に見直すことから始め、新たな知見を加えながら大幅な加筆修正を施し、2018年に博士論文と同名の *The Structure of Defoe's Phrasal Verbs: An Exploration into Defoe's Language of Fiction* を溪水社から刊行しました。肝心の本の内容ですが、出版社が考えてくれた以下の宣伝文が端的に紹介しています：

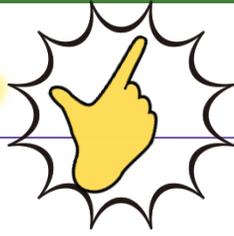
「イギリス小説の父」とも称されるダニエル・デフォーの小説言語を分析。
デフォーの鮮烈でリアルな描写の鍵を握る「句動詞」の構造を実証的に解明する。(英文)

幸いなことに、現時点で絶版になっておらず Amazonでも確認 (購入も!) できます。

振り返ると、この本が完成したのは、恩師を含む多くの方々のご指導とご鞭撻のおかげなのですが、ケンブリッジでのあの濃密な一年がなかったら、もっと内容の薄い考察に終始していたことでしょう。ところで、私の職業は教員ですが、肩書きを問われたら、〈教授〉や〈博士〉ではなく、〈この本の著者〉というのが一番しっくりきます。そう、ずっと私がりたかったのは、シンプルに〈本を書く人〉だったのです。



私のイチオシ



環境・エネルギー工学系
 応用化学/環境生命コース 内田 雅也 先生

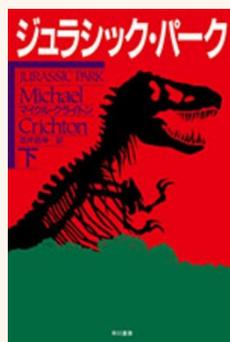


『ジュラシック・パーク』（上・下）
 （マイクル・クライトン 著/酒井 昭伸 訳）



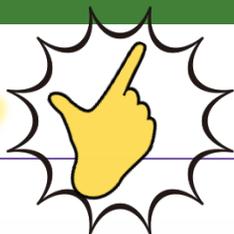
CLコースの内田です。今回、イチオシの本を紹介する機会をいただきましたので、1冊の本を紹介したいと思います。紹介する本は『ジュラシック・パーク』（マイクル・クライトン）で、恐竜を蘇らせたテーマパークが舞台の作品です。映画にもなりましたし、最近では映画の続編として『ジュラシック・ワールド』も上映されましたので知っている人も多いかと思います。私も最初は映画化されることで本作品を知り、遺伝子技術によって絶滅した生物をよみがえらせるという発想にすごく興味を持ちました。映画で恐竜が復活しているのを見たときはすごく興奮したのを覚えています。この作品がきっかけで分子生物学に興味を持ったというのもありますし、この作品が今の職業を選択したきっかけの一つかもしれません。

物語は、バイオテクノロジー企業〈インジェン社〉が琥珀に閉じ込められた蚊のDNAを解析し、恐竜を復活させることに成功したことから始まります。創設者ジョン・ハモンドは、コスタリカ沖の孤島に恐竜を展示するテーマパーク〈ジュラシック・パーク〉を建設し、科学者や専門家を招待して視察を行います。しかし、数学者イアン・マルコムはカオス理論を用いて、パークのシステムが破綻する可能性を警告します。視察中、パークのエンジニアであるデニス・ネドリーが恐竜の胚を盗み出そうとし、システムを停止させたことで、恐竜たちが脱走します。来園者たちは命がけで島からの脱出を試みます。来園者の古生物学者アラン・グラント達は、ヴェロキラプトルやティラノサウルスの脅威にさらされながらも、知恵と勇気を駆使して生き延びます。最終的に、パークは制御不能となり、政府の介入によって島は爆撃され、恐竜たちは絶滅します。物語は、科学の進歩と人間の過信がもたらす危険性を問いかける哲学的なテーマを含んでいます。映画版とは異なり、小説ではより科学的・倫理的な視点が強調され、恐竜の生態や遺伝子操作の問題が深く掘り下げられています。興味があれば、ぜひ原作を読んでみてください。



『ジュラシック・パーク』の遺伝子技術は、琥珀に閉じ込められた蚊の化石から恐竜のDNAを抽出し、現代の技術で復元するという設定です。しかし、実際には6600年以上前のDNAを完全な形で保存することは不可能とされています。DNAは時間とともに分解し、521年で情報の半分が失われ、150万年経過すると解析不能になるため、恐竜のDNAを直接復元することは科学的に困難です。現代の遺伝子工学では、恐竜の復元は難しいものの、鳥類のDNAを操作することで恐竜に近い生物を作り出す研究が進められています。例えば、鳥の遺伝子を改変し、尾や歯を持つ「恐竜型の鳥」を作る試みが行われています。こうした技術は倫理的な問題も伴いますが、未来の〈ジュラシック・パーク〉に近いものが実現する可能性はあります。遺伝子技術の進歩によって、恐竜の復元がどこまで可能になるのか、今後の研究が楽しみです。

私のイチオシ



図書館運営室・室員（副館長）
原 武嗣（人間・福祉工学系 情報システムコース）

『人は聞き方が9割
1分で心をひらき、100%好かれる聞き方のコツ』
（永松 茂久 著）



今年度より図書館副館長を担当しております、情報システムコースの原です。よろしくお願ひします。図書館は、学生時代によく利用していた思い出があります。特に定期試験前には、友人と長時間滞在することもありました。自宅ではなかなか勉強に身が入らなかったのですが、図書館に行くと不思議と気持ちが引き締まり、落ち着いて学習に取り組むことができました。また、図書館は、学習の場であると同時に、友人とのつながりを深める大切な場所でもありました。皆さんにとっても、図書館がそのような場の一つとなるよう、快適に利用できる環境づくりに努めてまいります。

図書館スタッフとしての初仕事は、「イチオシの本」の紹介です。紹介するのは、永松茂久さんの著書『人は聞き方が9割』です。人とのコミュニケーションは、私達が社会で生きていくうえで欠かせないものです。巧みな話術で周囲を惹きつける「話し手」に憧れた経験がある方も多いのではないのでしょうか。しかしながら、この本では、「人間関係の本質は実は聞き手側が握っている」とし、「聞き方が9割」というタイトルの通り、聞く力の重要性に焦点を当てています。聞き手として大切なことは、相手の話を遮らず、否定せず、関心を持って耳を傾けることです。これらの3つの姿勢を実践するだけでも、良い聞き手としては十分だと感じるかもしれません。一方で本書では、それだけにとどまらず、聞き手でありながら会話の雰囲気を作り出すための工夫が、実例とともに示されています。例えば、「オーバーリアクション」や「大きくうなずく」といったリアクションの活用法です。聞き手が正しく使えば、相手が気持ちよく話せる環境を生み出し、会話が自然と弾むようになることが示されています。具体例として、某有名司会者のトーク番組での振舞いが挙げられています。彼は大きくうなずいたり、テーブルを叩いて大げさに笑ったりしますが、これは単なるリアクションではなく、「相手の話を引き出す高度な聞き手の技術」であることが述べられています。その他にも「他人からの評価をあげる聞き方」など、実用的なノウハウも数多く取り上げられています。これらの技術を身につけ、実践するのは簡単ではありませんが、本書では、丁寧な学習法が解説されています。私自身、普段の会話で「聞く姿勢」を意識するようになってから、会話のやりとりが少し楽に感じられるようになりました。皆さんの周りにも「この人には話しやすい」「この人に話すのが気持ちよくなる」と感じる方がいませんか？もしかすると、その方は本書に書かれているような技術を身につけられており、日常の会話の中で自然に実践されているのかもしれません。

これまで、話し手としての技術をもっと磨きたいと考えることが多かったのですが、今では「聞く力」の魅力に惹かれています。本書は、話し手のスキルではなく、聞き手としての在り方に焦点を当てることで、良好な人間関係の築き方を学べる一冊です。話すことが苦手な方には、特におすすめです。上手な話し手にも負けないくらい、聞き手としてのコミュニケーション力を磨くことができるかもしれません。ちなみに、同著者は、『人は話し方が9割』という、全く逆のテーマを扱った書籍も執筆されています。どちらのスタイルが自分に合っているのか、ぜひ皆さんも読み比べてみてください。

人は
聞き方が
9割 永松 茂久

1分で心をひらき、
100%好かれる聞き方のコツ

図書委員のおすすめ本

各クラスの図書委員にみなさんに薦める1冊を選んでもらいました。新着コーナーに置いてありますので、ぜひ、手に取ってみてください。



1年3組
横山 陽一朗さん

『異邦人』
カミュ 著
窪田 啓作 訳

この本はアルジェという場所に住んでいる青年ムルソーの死刑になるまでを描いた本で、その要因となった事件までの彼から見た日常の描写から彼の心情などが細かく描かれており、彼の感じている世界の空気感を感じることでできる文になっています。ぜひ読んでみてください。

『ある閉ざされた雪の山荘で』
東野 圭吾 著

この殺人は、果たして本当に芝居なのか、それとも一。招集されたのはオーディションに合格した七名の役者たち。舞台稽古と提示された中、一人また一人と仲間が減り、現実と演技の境界線が曖昧になっていく。伏線回収に引き込まれる、最後まで真相が見抜けない緊迫のミステリー！



2年2組
長野 心春さん

『海辺のカフカ』
村上 春樹 著

15回目の誕生日、1人の少年は東京から香川へ家出を決意した。一方、アメリカ陸軍情報部報告書のインタビュー記録。2つの物語が紡いだ先にある物語の結末とは。少年のダークで複雑な心情を巧みな比喻で描写しているところが魅力です。ぜひ読んでみてください。



1年5組
國廣 蘭々さん



『半沢直樹 アルルカンと道化師』
池井戸 潤 著

大人気ドラマ『半沢直樹』第一期の前日譚に当たる作品。老舗出版社に対する買収計画を阻止するため、謎の絵画『アルルカンとピエロ』を巡った攻防を繰り広げる一作です。真摯な姿勢で懸命に働く半沢の姿は、26卒の皆さんに必見です。

5年情報システムコース
緒方 蓮さん



1年4組
中原 力哉さん

『星くずの殺人』 桃野 雑派 著

私のおすすめの本は『星くずの殺人』という本です。この本はクローズド・サークルもののミステリー小説です。しかし、よくある設定の閉鎖空間での殺人とは異なります。その違いとは無重力空間での首吊りということです。ぜひ、この本を読んで事件の真相を解き明かしてください。

『下町ロケット』池井戸 潤 著

ロケット打ち上げ失敗の責任で主人公は宇宙開発を離れ実家の町工場を継ぐ。特許を巡る争いや大企業との付き合いを経て再び宇宙開発を目指す。この本は技術者寄りに書かれた企業小説です。有明高専に起業家工房やCEDCが設置された今、ぜひ読んでみてください。



2年3組
田中 良和さん

『ぼくは13歳 職業、兵士。あなたが戦争のある村で生まれたら』
鬼丸 昌也／小川 真吾 著

13歳で兵士となった少年の実話を元に、戦争の悲惨さと子どもたちの過酷な現実を描いた一冊です。幼さの残る少年が銃を手に取らざるを得なかった背景や心の葛藤が胸に迫ります。日本の平和な日常との対比から、私たちが向き合う課題にも気づかされます。考えさせられる物語です。



4年建築コース
徳森 真凰さん



1年2組
小宮 智史さん

『世界は「」で満ちている』
櫻 いいよ 著

この本は、学校があるから毎日を楽しみに過ごしていた中学生の主人公が大事な友達に裏切られ、1人仲間の幼馴染の男の子と話していくものです。知らない噂で1人にされる事、数年ぶりの幼馴染との再開。この2つに悩まされ、生活を送る主人公を、ぜひ読んで知ってほしいです。

『月の影、影の海 十二国記』
小野 不由美 著

ある日突然、異界へ連れ去られた高校生、陽子。異形の獣が跋扈し崩壊を目前とした国で、追手、裏切り、飢餓、襲いくる困難に自分の存在を問いかける。優等生を演じて周囲に流されてきた陽子が自己と向き合い成長していく姿を描く、十二国記シリーズの第一作。



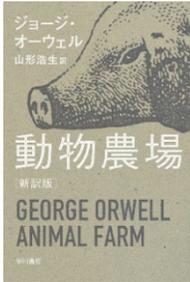
2年4組
銭谷 遥子さん



4年エネルギーコース
松田 暖乃介さん

『新訳リチャード三世』
シェイクスピア・ウィリアム 著
河合 祥一郎 訳

この本は、冷酷で狡猾なりチャードが王位を狙い、次々と陰謀を巡らせて人々を翻弄する物語。彼の策略と野望は読む者を惹きつけ、権力に知り憑かれた人間の姿を鮮烈に映し出します。張り詰めた緊張感と壮絶な結末が待つ、歴史劇の名作。ぜひ読んでみてください！



『動物農場』 ジョージ・オーウェル 著

動物たちが農場を乗っ取り、平等な社会を目指す物語。動物たちは「すべての動物は平等」を掲げて新たな秩序を構築するが次第に権力の腐敗と裏切りが明らかになっていく。ロシア革命とスターリン体制を風刺しており、深く考えさせられる作品である。

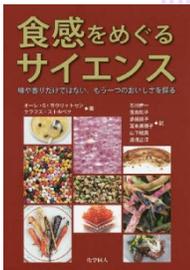
3年建築コース
西山 柑奈さん

『四畳半神話大系』 森見 登美彦 著

皆さんは本を選ぶ際に何を重視しますか？キャラクター？ストーリー？美しい文章や文体？それらが全て詰まった小説が四畳半神話体系です。癖の強いキャラクターが織りなす、予想できないストーリー、そして自然と口に出したくなる美しい文章。みなさんもぜひ読んでみてください。



3年メカニクスコース
石川 詩音さん



『食感をめぐるサイエンス 味や香りだけではなく、もう一つのおいしさを探る』
オーレ・G・モウリットセン 他 著／石川 伸一 他 訳

「おいしさ」の大きな要素である「食感」を科学的に解き明かす一冊です。噛みごたえや舌触りなどの感覚が味の知覚にどのように影響するかを分子や物理の視点から探り身近な食の楽しみをより深く理解できる新しい知的体験を提供してくれます。レシピやコラムもあり楽しく学べます。

5年応用化学コース
山口 真広さん

『一次元の挿し木』 松下 龍之介 著

遺伝人類学を学ぶ主人公が二百年前の人骨をDNA鑑定にかけると、四年前に失踪した妹のものと同じ。妹の生死と人骨のDNAの真実を突き止めるべく主人公は動き出す。なぜ200年も昔の骨と妹のDNAが一致したのか？妹は一体何者なのか？予想もつかない壮大な陰謀劇でした。



5年建築コース
坪井 瑠花さん



『空想科学読本』柳田 理科雄 著

空想科学読本はSF科学の考察でアニメやマンガ、特撮番組などの空想科学の世界を現実の科学的な視点から検証する書籍です。私が、この本をおすすめする理由は作品で描かれる様々な現象を物理法則や生物学的な側面から作者がおもしろく解説してくれるので知識を楽しく学べます。

5年メカニクスコース
柏木 晃汰さん

『かがみの孤城』辻村 深月 著

あなたの日常は、果たして本当に【当たり前】なのですか。
あなたのひとことで身近な誰かの平穏な日常を、
変えてしまっていないでしょうか。
中学生の頃、みんなの学校に1人はいたであろう不登校の子供達が送る、とつてもふしぎな鏡の中のお城の物語。

1年1組 板尾 龍征さん



ある日突然、部屋の鏡が光り中へ入るとそこは古い城であった。オオカミさまと呼ばれる少女が城に隠されたカギを見つけたらどんな願いでも叶えると告げる。カギを見つけようとするが城には決して破ってはならない規則があって...とても感動する作品なので是非読んでみてください！

4年応用化学コース 古賀 美樹さん



『また、同じ夢を見ていた』
住野 よる 著

将来の自分って何者なのでしょう。お金持ち？有名人？もしかしたら貧乏人かも。そのくらい未来なんて知りえないのです。でも、もしかしたら未来の自分はいつの間にか傍にいてくれてアドバイスをしてくれるかも。人生は小説より奇なり、それを生かすも殺すも貴方次第。

2年1組
成富 萌華さん

『少年と犬』
馳 星周 著

馳星周『少年と犬』は、東日本大震災で飼い主を失った犬「多聞」が人々と出会いを重ね、絆を結びながら旅する物語。人間の孤独や欲と犬の愛情が関わり合い、生命の尊さを問ひかける感動作です。犬と様々な人との交錯の様子に心動かされます。ぜひ読んでみてください。



2年5組
川原 龍也さん

『鹿の王』
上橋 菜穂子 著

今回紹介させて頂くのは「鹿の王」です。守り人シリーズや獣の奏者の著者である上橋菜穂子氏の手掛ける本作は、主人公のヴァンが疫病がもたらす災厄の渦中に巻き込まれて行きながらも、家族を亡くした少女ユナとの絆を育むという物語です。そんな名作をぜひご一読ください。



3年エネルギーコース
阿部 涼生さん



『謎の香りはパン屋から』
土屋 うさぎ 著

パン屋「ノスティモ」を舞台にした、大学1年生の市倉小春が主人公の連作ミステリー小説です。パン屋で起こる日常の謎を、漫画家を目指しながらアルバイトをする小春の鋭い観察眼と推理で解き明かしていきます！ぜひ読んでみてください。

3年応用化学コース
外戸保 千晴さん



『オールド・テロリスト』村上 龍 著

老人と聞いて皆さんは最初に何をイメージするだろう？物知り？面白い？あるいは自分の将来の事を思い浮かべるかも知れない。今の後期高齢者は戦争を生き残り、病気も乗り越え今の時代を築いてきた超人達である。そんな人達が巻き起こす騒動がどんな物か、ぜひ読んでみてください！

3年情報システムコース
久保 夏輝さん

『49日間君がくれた奇跡』晴虹 著

死にたい気持ちを抑えられず飛び降りた 主人公 ゆり が目を覚ますと、別人・美樹 の姿に。そしてそれは ゆり が死ぬ49日前。美樹 として生きていく中、美樹の同級生 隼人 と出会い、再び人生をやり直したい気持ちになる。生死、出会いと別れが生み出す感動的な作品です。



4年メカニクスコース
森田 晴貴さん

『ヴェールドマン仮説』
西尾 維新 著

僕以外、家族全員が名探偵という特異な家庭で、いつも裏方に徹していたはずの僕。しかし、突如として現れた謎多き怪人事件に巻き込まれ、ついには自ら真相を追うことに!? 西尾維新が満を持して贈る、記念すべき著作100作品目を飾る待望の話題作です!!



4年情報システムコース
住 彩乃さん



『午後の曳航』
三島 由紀夫 著

誰もが持ちえたはずの栄光を、私たちはいつ、忘れ呆けてしまったのだろう。本作品は単なる酷劇ではない。大海の泡沫がまだ敗戦の苦味を残す戦後横浜で、三人の主人公の「栄光」が交錯する。恋愛・結婚という甘美な劇薬を前にして、彼らはどのように振舞い、栄光を使用するのか？

5年エネルギーコース
前川 悠哉さん



Report of Book Hunt in 2025

8/22, Friday

今年のブックハントは例年と異なり、九州大学 中央図書館（伊都キャンパス）を見学し大学図書館の建物や、蔵書、展示に触れたのち、博多駅 丸善へ移動して実施しました。図書館運営室の石川元人（主筆）、山田高明（協力）がレポートいたします。

1. After visiting the university library

今年は3年生5名のブックハンターが参加（3Eから内野 琴美さん、3Iから柿原 奈々美さんと三池 彩弥加さん、3Cから外柙保 千晴さん、2-4から銭谷 遥子さん）、引率はCLコース石川（言い出しっぺ）とG科山田（サポーター）が務めました。

9:30に博多駅集合、10:30に現地集合組と合流して入館しました。3Fのエントランスで手続きを行った後、ご案内いただき12:00まで館内ツアーを実施しました。この項では館内の写真とともに、参加学生の生の感想をお届けします！

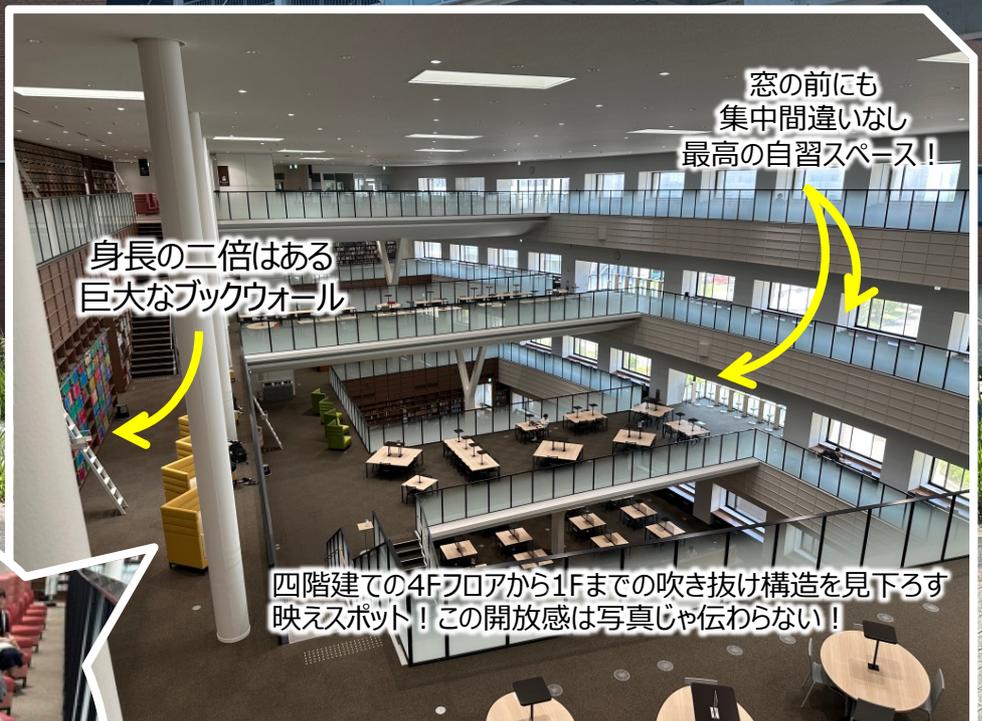
入口での記念撮影



通称、「王の椅子」！座れば半個室のような感覚を味わえるソファーです。各階の基調となる色があり1Fから順番に、青→緑→黄→赤となっています。色が青になる程、館内も静か！



身長の二倍はある
巨大なブックウォール



窓の前にも
集中間違いなし
最高の自習スペース！

四階建ての4Fフロアから1Fまでの吹き抜け構造を見下ろす
映えスポット！この開放感は写真じゃ伝わらない！

3F → 1F → 2F → 4Fという順路を歩き、館内蔵書と設備の紹介を受けました。中央図書館は国立大学図書館でNo. 3の蔵書を誇ります。圧倒的な数の本に囲まれ、紙の匂いに包まれながら時間を忘れて見学していました。写真には見えませんが、各階左手にも書庫、地下には自動書庫があります。なんと、自動書庫は大学構内の自室PCからアクセスして、本の呼び出し・運搬が可能とのこと。

Q1 図書館の吹き抜け、ブックウォールなどの空間構成について、印象や感想を自由に教えてください。

色彩設計：階層ごとに基調色が準備され、静けさや雰囲気が深まるように下の階層ほど寒色に変化する点が印象的で、実際に効果が感じられた。

光と開放感：吹き抜けと大きな窓で館内に光が差し込み、開放的な空間が学習意欲を刺激していた。

ブックウォール：古書を含む壁一面の本棚は圧巻で、非日常的な空間に没入できる感動を覚えた。古書が並んでいるにもかかわらず、空気が澄んで快適であった。

Q2 随所に工夫された椅子や机、それらのリペア品、スライド書庫などを見て感想を教えてください。

多様な椅子・机の魅力：ゆらゆら揺れる椅子や個室感のある椅子などがあり、用途や気分に応じて選べる点良かった。揺れる椅子は落ち着きや楽しさを感じた。

書庫設備の先進性：集密書庫や自動書庫の存在が印象的で、大量の蔵書を効率的に管理・利用できる便利さに驚いた。安全面も考慮されており、実用性と両立していた。

利便性と快適性の両立：書庫システムによる検索・貸出の効率化と、リラックスしながら読書できる家具配置が、図書館を「学習」と「くつろぎ」の両方に適した空間にしていた。

Q3 館内各所にグループワークを行う演習室、研究個室、通話ブースなどが設けられていました。あなたの感じた印象を教えてください。

選択肢：グループワーク室、研究個室、自習室、通話ブースなど、活動内容に応じて自由に使える場所が整っており、利用者のニーズに合った柔軟な環境だと感じられた。各階に通話ブースがあることで、広い館内でも外に出ずに通話できる工夫や、演習室が可動式の仕切りで大部屋になる工夫も印象的だった。

快適性：自習室や個室では、机や椅子の種類・広さが選べ、その日の気分や作業内容に合わせて環境を整えられるのが魅力的と感じられた。周囲の視線を遮って学習に集中できる個室があることは、試験期間などに大きな助けになる集中できる空間だと感じた。

Q4 1-3Fは研究用図書、記録資料館がありました。文系の図書が多かったですが、印象に残ったところを感想と一緒に教えてください。

多言語の蔵書：英語以外にも中国語・韓国語などの本や海外の図書が豊富にあり、普段触れられない言語や文化に出会えた点が新鮮だった。アメリカ裁判記録や中国語のシリーズ本が何十巻も並ぶ光景は壮観で、量の多さに圧倒された。歴史や社会の重みを感じさせた。

本を読みたくなる工夫：本に挟む葉は自由配布されており、それぞれの本に合わせたデザインになっており、利用者の読書意欲を高める工夫として印象に残った。

Q5 九大中央図書館について、そのほかの感想を自由に教えてください。

会話あり学習スペース：ホワイトボードでできている机が便利で、机に直接書き込んで仲間と考えを共有しやすい作りになっていた。会話可能な場所が区切られていることで、静かな学習と使い分けできる点も良い。友人との勉強や討論、イベントの場としても有効で、有明高専にも導入してほしいと思いました！！

学生用図書（10万冊、展示本等）：1年生～2年生用の図書は圧倒的な蔵書量があり、資格本・TOEIC教材・多読本・放送大学教材なども取り揃えられていて、しかも幅広いジャンルに驚いた。「九大100書」や展示コーナーなど、選書に役立つ工夫がみられた。本棚の横に机があり、すぐに資料を参照できる図書館らしい便利な環境だった。また、中村哲氏の展示など、特色ある常設展示も印象的であった。

大学院生TAの仕組み：もしも大学生なら活用して、勉強法やレポートの書き方、課題の相談をしたいと思った。進学や就職の実体験を聞けるのは貴重であり、キャリア形成にも役立つし、専門分野の知識を活かした動画や解説を提供してもらえると、双方にとって学びになると感じられた。

How did you select books of library? 選書した学生の声

他の人も読めるかどうかを基準に持って、自分では買いにくい高価な本や、理系以外の分野（経済・地域社会・ビジネス・脱炭素・小説など）も積極的に選んだ。衝動買いを避け、一度全体を見渡してジャンルを絞り、予算内で調整する工夫に取り組んだ。「読みやすさ」「実用性」「信頼性」を重視しようと頑張った。

Teachers' Voice! 引率教員の声

今回の見学では母校の図書館ならではの経験をしました。1Fと2Fには今はなき九大箱崎キャンパス中央図書館と六本松図書館から移設された勉強机が並んでいました。Long time no see! 学生時代にレポートや博士論文を書いた机がリペアされながらも、当時からの傷はそのままです。仕事に向かう気持ちに気がつけば贅肉がついているぞと昔の自分に叱られたような、背筋の伸びる思いでした。（石川）

九大図書館のガイドさんの口から初っ端「金光明最勝王経」と出てから脳が大興奮でした。『金光明最勝王経』は漢訳の仏教経典で、九大所蔵の国指定重要文化財です。平安末期の日本語を知る重要文献でもあります。文系・理系問わず、各分野の知の集積地である図書館ですが、九大図書館は抜きんてて素晴らしい施設でした。（山田）

Changes in selected books on book-hunting 選書内容の変遷

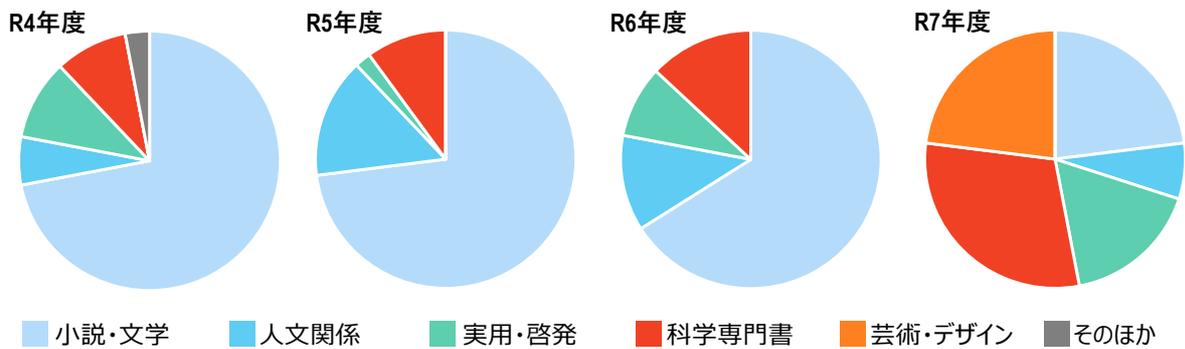


図. 年度毎の選書内訳の変遷

図書コードに従い分類したのち、以下の通りに再分類を試みた。

小説・文学	日本文学、外国文学、SF、ミステリー、翻訳小説など
人文・社会	哲学、思想、歴史・時事、政治・国際、人物伝
実用・啓発	経済学、経営、心理実用、自己啓発、生活実用
科学専門書	科学・テクノロジー、AI・情報科学、自然科学・生物、科学史
芸術・デザイン	デザイン、表現技法、語学、芸術関連

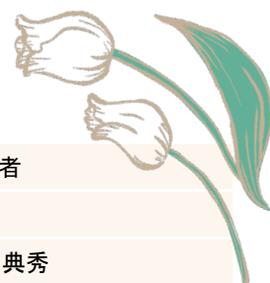
書籍には管理番号というものがあります。少し詳しく説明すると、出版物の裏表紙や奥付に“ISBN978-4-○○○”という文字列が印刷されているのを見たことがあると思います。電子書籍にもあります。これを「国際標準図書番号」International Standard Book Numberと言います。出版された国や地域(978-4) + 出版者 + その何番目の本なのか、すなわち固有の出版物を発行形態別、1書名ごとに識別するコードです。

日本の出版では、独自の国内基準である分類記号(Cコード)と価格記号(本体価格の情報)を付加して、「日本図書コード」として標準化しています。「日本図書コード」の文字情報をバーコードで表現したものが「書籍JANコード」と言い、流通上の必要に応じて使用することができます。本をひっくり返した時に出てくる2段のバーコードの1段目を観察してみてください。

さて、この項では各年度毎のブックハントの選書内訳をCコードにしたがって分類し、似通ったものについて大ジャンルを準備して円グラフとしてみました(上図)。R4年度～R5年度は圧倒的に小説が多く、中でもライトノベル等の選書があまりに多かったです。R7年度(本年度)では小説・文学が急減し、科学専門書・芸術デザイン・実用系が拮抗するようになり、「専門・実用中心」の構成に近づきました。選書にあたり、バランスをとるように具体的に指導したことも理由の一つと考えますが、教員が選書を事前に弾くなどは行っておりません。書店では学生自身が「高専の図書館にも良い本を増やしたい」という意欲が見えました。参加学生からは、図書館ツアーが大変良い刺激になり、進学意欲や勉強へのモチベーションが高まったという声のほか、見学後の選書は特に気持ちが盛り上がり、より良い本を選ぶ助けになるとの声が寄せられました。またこのような機会を準備して他学生にもチャンスを準備できれば幸いです。(石川)



== 〈図書ツアー〉参加学生が選んだ図書一覧 ==



書名	著者
作り方を作る	佐藤 雅彦
ノンデザイナーズ・デザインブック 第4版	Robin Williams/吉川 典秀
国宝<上> 青春篇(朝日文庫 よ16-6)	吉田 修一
国宝<下> 花道篇(朝日文庫 よ16-7)	吉田 修一
正欲(新潮文庫 あ-78-3)	朝井 リョウ
行動経済学が最強の学問である	相良 奈美香
とりあえず、素人っぽく見えないデザインのコツを教えてください!~初心者のためのデザイン書~	ingectar-e
英単語の語源図鑑~見るだけで語彙が増える~	清水 建二/すずき ひろし
プレゼン資料の図解化大全~10秒で伝わる!~	前田 鎌利/堀口 友恵
大量に覚えて絶対忘れない「紙1枚」勉強法	棚田 健太郎
経営に活かす生成AIエネルギー論~日本企業の伸びしろを探せ~	高野 雅晴/岡本 浩
図解でわかる再生可能エネルギー×電力システム~脱炭素を実現するクリーンな電力供給技術~(未来エコ実践テクノロジー)	一般財団法人 エネルギー総合工学研究所
図解眠れなくなるほど面白い元素の話	澄田 夢久
これだけは知っておきたい「税金」のしくみとルール~複雑な税金が、これ一冊でわかる!~ 改訂新版11版	梅田 泰宏
新お金の基本(サクッとわかるビジネス教養)	杉山 敏啓
ITの仕事に就いたら「最低限」知っておきたい最新の常識~ITのトレンドに、きちんとキャッチアップできてますか?~	イノウ
ネコは<ほぼ>液体である~ネコ研究最前線~	服部 円
女生徒 改版(角川文庫)	太宰 治
カフネ	阿部 暁子
ソフトウェア開発現場の「失敗」集めてみた。~42の失敗事例で学ぶチーム開発のうまい進めかた~	出石 聡史
文豪は鬼子と綴る	嗣人
ケースで学ぶものづくり中小企業の戦略~広島から全国、そして世界への躍進~	岡本 康昭/野北 晴子/加藤 博和
歩いて読みとく地域経済~地域の営みから考えるまち歩き入門~	山納 洋
縁起のよい樹と日本人 新装版	有岡利幸
ビジネス屋と技術屋と一緒に考える脱炭素	江田 健二/矢田部 隆志
赤と青のガウン~オックスフォード留学記~(PHP文庫 あ66-1)	彬子女王
まじめに動物の言語を考えてみた	アリク カーシェンバウム
窓ぎわのトットちゃん<続>	黒柳 徹子
僕たちは、宇宙のことぜんぜんわからない~この世で一番おもしろい宇宙入門~	ジョージ・チャム/ダニエル・ホワイトソン/水谷 淳
池上彰の世界の見方 中国・香港・台湾~分断か融合か~	池上 彰



図書館統計

■令和6年利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	25	24	25	25	19	18	26	24	21	19	21	20	267
入館者総数	3,391	4,777	3,808	4,621	1,488	999	4,275	4,771	3,743	3,696	1,860	1,132	38,561
(内夜間)	371	807	482	771	79	7	446	794	460	575	151	0	4,943
(内土曜日)	119	72	156	131	25	0	50	158	95	20	39	0	865
1日平均	136	199	152	185	78	56	164	199	178	195	89	57	144
貸出冊数・総数	231	257	254	193	89	22	225	144	362	170	150	47	2,144
(内夜間)	33	59	41	22	13	5	6	6	13	29	21	0	248
(内土曜日)	16	4	5	2	0	0	0	63	1	0	1	0	92
1日平均	9	11	10	8	5	1	9	6	17	9	7	2	8

■分類別図書貸出冊数の推移

年度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学(*1)	産業	芸術	語学	文学	多読	その他(*2)	合計
令和2年度	12	52	39	62	118	534	1	25	31	202	108	442	1,626
令和3年度	20	69	39	62	128	635	3	17	41	269	104	457	1,844
令和4年度	12	69	28	43	223	610	4	21	33	347	116	561	2,067
令和5年度	62	81	24	52	170	440	7	37	44	480	48	482	1,927
令和6年度	59	110	24	51	128	410	3	39	56	439	224	601	2,144

*1 H27年度以降の「工学」は、007情報科学、430-439化学、460-469生物一般の貸出冊数が含まれる

*2 「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す

■利用状況の推移

年度	開館日数	利用登録状況				入館者数		貸出冊数				1日当たりの数値		1人当たりの数値	
		総数	(内学生)	(内教職員)	(内学外利用者)	総数	(内夜間、土曜日)	総数	(内学生のみ貸出冊数)	内夜間、土曜日	(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
令和2年度	252	1,334	1,119	202	13	28,165	3,125	1,626	1,425	240	70	112	6	1.3	1.2
令和3年度	267	1,607	1,120	213	10	34,655	4,409	1,844	1,632	306	59	130	7	1	1
令和4年度	268	1,291	1,121	157	13	32,781	3,997	2,067	1,677	390	113	122	8	1.5	1.6
令和5年度	264	1,267	1,116	139	12	36,676	5,061	1,927	1,633	343	93	139	7	1.5	1.5
令和6年度	267	1,245	1,092	143	10	38,561	5,808	2,144	1,837	340	89	144	8	1.7	1.7

■学年別図書貸出冊数

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	専攻科1年	専攻科2年	合計
令和2年度	111	140	242	382	371	79	100	1,425
令和3年度	172	106	261	460	303	250	80	1,632
令和4年度	189	289	195	393	376	105	130	1,677
令和5年度	356	56	506	156	332	109	118	1,633
令和6年度	384	361	179	488	243	84	98	1,837

コロナ禍で一時利用が減りましたが、少しずつ回復してきました。これからも図書館を沢山ご利用ください。

特設コーナー



さて、私は何を書けばよいのか

図書館運営室室員 山田 高明

高専の講義では話す機会があまりないが、私の専門は言語学である。ことばを扱う学問である。「ことばを扱う」と言っても、①どのようなことば（だれのことば、どの地域のことば、どの時代のことば、どの媒体のことば…）、②どう扱うか（音声・語・文・意味…、質的・量的…）など、言語学の範囲は多岐にわたる。我々は無意識にことばを交わすが、そこにどんなシステムや構造があるのか、それを明らかにするのが言語学者の仕事のひとつである。詳しく知りたい人は4・5年生開講の「日本語の表現技法I・II」を受講されたい。そんな言語学の中で私の関心は、日本語諸方言の音声やアクセントだ。素朴な直観としても、日本各地でいろんな方言が話されて、それらは母音や子音、アクセントやイントネーションをたがえているというのはわかる。どの地域でどんな方言が話されていて、それらはどの地域と共通点・相違点を持つのか、なぜそのような違いが生まれたのか…研究すべきことは山ほどある。

では、なぜ私は今、日本語の方言の研究をしているのか。共通語や英語ではなく。そのモチベーションのひとつに自分の第一言語が「方言」であることが挙げられよう。20歳半ばまで熊本の八代市で過ごした私は八代方言を話す（講義では共通語だが）。当然ながら八代方言は八代市で話されているので、東京や大牟田、熊本市で生活するとことばの違いにいやほど敏感になる。そのたびに、ああ私は八代衆（やっちろんし）なのだ実感する。同時に、八代平野の風景や祭り、子供のころの思い出や家族のことを思い出す。ことばや方言というのは、それが話される地域・集団と密接に結びついている。もう少し言うと、言語はアイデンティティ（自分が何者であるか）を構成する重要な要素をなす。さて、そんな言語が消滅するとどうなるか。アイデンティティの喪失である。言語が消滅するのかもしれないが、程度の差こそあれ、日本全国で伝統的な方言は消滅しつつある。八代や大牟田も例外ではない。そろそろ紙幅がなくなってきたが、そんなわけで私は今の研究をしている。言語学者がどうやって方言の調査をしているか、次回があればつらつら書いてみようと思う。

編集後記（巻頭言のエピローグとして）

巻頭言で紹介した自著について、出版後すぐに「この本を書き上げることができたのは貴図書館を1年間利用できたおかげです」という内容の英文メッセージを添えて〈大学図書館〉(の司書)に一部寄贈しました。お礼のメールはいただいたものの、果たして真っ当な研究書として閲覧室の書棚に配架されるのか半信半疑でした。2023年の夏休み、科研費が採択されたことで（留学後初めて）ケンブリッジを再訪しました。本当に久方ぶりの〈大学図書館〉。入館して、恐る恐るコンピュータで蔵書検索をしたところ・・・ちゃんと登録されているではありませんか！英文学研究書コーナーにひた走り、名著・好著がぎっしり詰まった書棚から自分の書いた本を見つけ出し、手に取った時の喜びは筆舌に尽くし難いものがありました（右写真参照）。苦労したけれど自身で定めた研究課題に真剣に向き合い、〈本〉の形で決着をつけることができ本当によかった。もちろん、自分の研究および執筆活動はこれで終わったわけではありません。私という存在は、本を読み、このような文章も含め何かを〈書くこと〉で人生の意味を深掘りしていく宿命（さだめ）なのでしょう。さらなる挑戦は続く！

（図書館長 村田）

